

水島の不思議な事件

敦賀市立西浦小学校

六年

五年

濱上和也
遊津侑那
寺元菜月



各務原市立那加第一小学校

六年

太田菜月
片岡未菜美
土井崇暉
足立優

ある日、水島で事件が起きました。水島とは、海に浮かぶ浮島で、北陸のハワイといわれるくらい有名で、夏には海水浴のお客さんが来ます。その水島で、この夏、事件が起きました。その事件とは、四人家族が海水浴に遊びに来た時のことでした。

「今日は、みんなでバナナボートに乗るか」

とお父さんが言いました。するとお母さんが、

「じゃあみんな、水着に着がえて、したくをしましょう」

と、言ったので、みんな着がえ始めました。十分後、みんなのしたくができたので水島に行きました。水島に着き、バナナボートに乗りました。乗ったのは、お父さん、お母さん、五才の勇氣、十二才のうららでした。

「みんなあ、だいじょうぶかあ」

「お母さんは、だいじょうぶよ。勇氣。うらら、だいじょうぶ」

「勇氣はだいじょうぶ」

しかし、うららの声が聞こえません。

すると勇気が、

「お姉ちゃんがない」

とあせって言いました。お父さんが、

「みんなで、うららを探そう」

と言いました。探している途中で、勇気が、

「向こうに、おぼれている人がいるんだ」

「どこにいるんだ、お父さんには見えんぞ」

「でも、いるんだよ」

「じゃあ、勇気と見に行ってくるわね」

と言って、お母さんと勇気が二人で探しに行ってみると、やっぱりおぼれている子どもがいました。

「ねえ、早くこの子を助けてあげましょう」

「でも、待ってお母さん、変な感じがするんだ」

と、勇気が言った時には、お母さんは手を出していました。すると、お母さんがさけびました。

「きゃあー、助けてえー」

子どもの手が見えます。なんと、その手は、お母さんの手首をつかんでいるではありませんか。勇気がお母さんの手を引っ張ろうとしたら、お母さんは海へ引きずり込まれてしまいました。

そこへ、お父さんが来ました。

「どうしたんだ。勇気！」

「だれかに、お母さんが海に引きずり込まれちゃった。どうしよう、助けてあげられなかったんだよ……」

と言って、ふと見ると、海にだれかのうでが浮いていました。よく見ると、指に結こん指輪がはめられていました。その指輪には、お母さんの名前の「さゆ」

と書いてあります。お父さんが、

「どうしてお母さんの手が浮かんでいるんだ」

と聞きました。

勇気が全てのことを話すと、お父さんが、

「ごめんな勇氣。もうだいじょうぶだぞ。お父さんから離れるんじゃないぞ」

二人は陸に上がり、冷静になつて考えました。そして、

「警察を呼ぼう」

とお父さんは勇氣を安心させました。

三十分後……。

警察がとう着しましたが、犯人は分からず、お母さんのい体も見つかりません。
ん。

その日は、民宿にとまりました。でも、勇氣もお父さんもご飯を一口も食べられず、こわくてねむれませんでした。悲しくて悲しくて、二人とも涙がかれ

る程泣きました。

しばらくすると、とつ然ねむ気がおそってきて、二人とも寝てしまいました。

すると、不思議な夢を見ました。その夢とは、見覚えのある人が二人立って、

「オイデ、コッチニオイデ」

と何度も言っているものでした。しばらくして、勇氣は目が覚めました。

(何だったんだろう、今の夢)

と考えていると、お父さんも起きました。お父さんも何かなやんでいる様子で

した。勇氣が、

「どうしたの？ お父さん」

と聞くと、

「いやな、何だか変な夢を見たんだよ。だれかが手招きをしていたんだ」

「え？ そうなの、ぼくもその夢を見たんだ」

「なに、二人とも同じ夢を見るなんて、どうなっているんだ」

と話をしていると、もう七時になっていたので、ご飯を食べに行きました。でも、二人とも、お母さんたちのことが気になって、やはりご飯がのどを通りません。

そして、その日も警察のそう査は続きました。

しばらくすると、一人の警察官が、

「おい、何かあるぞ」

「なんですか。ん、だれかの名前が書かれていますね」

そこには、「うらら」と書いてあるサンダルがありました。その警察官は、お父さんのところへ来ました。

「お父さん、こんなものが落ちていたのですが、これに見覚えはありませんか」

「これはうちの娘のものだ。どこにあったんですか」

「向こうの浜に打ち上げられていたんですよ」

と話をしている時、勇氣は「ある人物」を見つけました。そして、勇氣はお父

さんに何も言わずに、その「ある人物」を追いかけていきました。★

―そのころ、警察署では―

「課長、これを見て下さい!!」

「何だ、神原君」

「前にも、水島では同じような事件が起きているんですよ」

「何、それは大変だ。すぐに知らせなければ」

―一方、勇氣は―

まだ、「ある人物」を追っていました。勇氣には心当たりがありました。少し身長が低く、クセのあるショートカット、後ろ姿は、どこをとつても姉のうららだったのです。

「おねえちゃん！」

勇氣はさげびしましたが、うららは人ごみの中に消えてしまいました。ぼう然と立ちつくしていた勇氣は、後ろから声をかけられました。ふり向くと、お父

さんが立っています。

「どうしたんだ？ 勇気」

「えっ、何でもないよ」

その後、二人は食事をすませて民宿に戻りました。

その夜、勇気とお父さんがねむろうとした時、一本の電話がかかってきました。お父さんが急いで受話器を取ると、

「もしもし、夜分おそくにすいません。警察署の神原ですが、水島の事件の事について、警察署の方で調べた結果をお伝えしたいので、明日警察署に来ていただけますか」

—そして翌日—

「今回の水島事件と全く同じケースの事件が三年前にも起きてるんです」

「えっ、それは本当ですか。その事件は解決したんですか」

「その事件の犯人は、つかまっているんですが……」

「そつ、それじゃあ犯人は……」

「まだ警察署の方でも調査中なので、また何かありましたら、連絡します。何か変わった事があれば、警察署にご連絡いただけますか」

「分かりました」

「お姉ちゃんのサンダルを見つけた時、むこうの方でお姉ちゃんを見たよ」

勇気はいきなりしゃべり出しました。

「そうなんだ。勇気君、ありがとう」

警察署を出た二人は、民宿に戻りました。そこで、勇気はおどろく人物を見つけたのです。

「お姉ちゃん！」

「勇気、何を言っているんだ」

「お父さん、あそこにお姉ちゃんがいるよ」

「どこだ、お父さんには見えんぞ」

「勇気、お父さんには、私が見えないし、声も聞こえないの。だから勇気、よく聞いて。お母さんは生きてるの」

そして、お姉ちゃんは消えてしまいました。

「お姉ちゃん！」

勇気がさけびました。そこへ、

ピンポーン。

「どうしたんですか。そんな大声なんか出して。パトロール中に声が聞こえたから、びっくりしましたよ」

「あつ、神原さん。勇気がとつ然、うららがいるって言い出したんですよ」

「本当だよ。お姉ちゃん、そこにいたんだ」

「そうなんだ。それよりお父さん。実は課長が犯人だという可能性が出てきたんです。詳しい事は分かりませんが、分かった事があつたら、お伝えしますの
で……」

「そ、そうですか……」

「それでは、また」

神原がげん関を出て行くと勇気が、

「あの人、あやしいね」

と言いました。

「えっ、そうかな」

お父さんには勇気の言葉も、神原の言葉も理解出来ませんでした。

その日の晩、お父さんは考えました。神原の言葉、勇気の言葉の意味を……。

次の日、お父さんは、神原の所へ行きました。

「神原さん、昨日勇気が言っていた事です」

「ええ、ぼくも気になっていましたよ」

「あと、神原さんは、課長があやしいと言いましたね」

「はい。先日も言いましたが、詳しい事は分かりません」

「詳しい事は分からないのに、何故言い切れるのですか？」

「……もうそこまで知ってしまったんだね」

神原が言うと、神原の後ろにとつじよ黒い仮面の男……いや、女が現れ、神原とその女は同時に消えてしまいました。

その女には片うでがありませんでした……。

勇氣は、ようち園が始まるため、おばあちゃんに預けられて、お父さんはまだ、水島に残ってあの女のことについて詳しく調べることにしました。

—そして数日後—

「こつ、これは……」

「なんで、さゆが……」

警察署に来ていたお父さんは、防犯カメラの映像を見ました。そこには、神原とお母さん、さゆが映っていたのです。

「神原君、あの計画はバレてないわよね」

「ええ、大丈夫です」

「それならいいわ。じゃあまた後で」

お父さんはそれからしばらくボーとしてしまいました。

「お母さんが犯人だったのか……？」

『ジリリリリリ……カチ』

勇気は目を覚ましました。

「……夢だったんだ。変な夢だったなあ」

「勇気っ、早く下りてきなさい。水島に行けなくなるわよ」